

柏キャンパスの心象風景と学問風景

以前に私は柏の心象風景が学問風景と重なり、共鳴しあうことになるだろうと書いた。その後、IPMU、大気海洋研究所がつくられていよいよ柏キャンパスの学問風景が変貌してきた。そして、私も定年退職し、いまは特任教授として柏の心象風景をつづろうとしている。東京大学の学問風景はキャンパスで大いに異なる。本郷が遠く明治の黎明期をにおわせ、ややもすると旧時代的なゴシックさが表に出るといえなくもない。そして駒場は初学者のひょっとしてあやうげな気配が風景の中に潜んでいる。

柏の風景にはやはり青年と壮年がもつたくましいまでの先進気質こそふさわしい。それは柏の原風景によせた東京大学の憧れにもいたる学への希求であったかもしれない。そして、自然的風景から投射される孤立感と其れに双対する高揚感とが、学問風景を独自のものに変容させ、そして心象風景へと回帰する。あるときは基礎科学を応用科学の応用へといざない、あるときは巨大極限科学を生活科学の先端に座らせ、そしてまた、脳のざわめきにマックスウェルのデーモンを呼び覚ます。

柏の四季の心象風景は、平坦な自然風景にも同期する。平坦であるがゆえに広大な関東平野の西の巨峰と東の霊峰をキャンパスを芯にして両の手の先に居し、静寂なる田園風景を周囲に配している。鶯のさけび、あげ雲雀の変調、そして椋鳥の群舞。それらが学問風景と同期するとき、その学問はたしかに世界と同期するときなのであろう。同期は柏キャンパスにおいて、すべての領域で共時的に起こることではないが、位相の連鎖は相互に強い相互作用を持ちながら移動していく。そして、いつかどこかで、異なる発生源をもつ位相の波はくりかえし衝突し、そして新たに変位した波を作り出すに違いない。

柏から拡散していった銀杏の葉の数々も、それらの心象風景と学問風景、そして自然風景をその芯に記憶しているに相違ない。芯はたしかに堅固な繊維によって固められ、容易には崩れることはないが、しかしそれでもあまりにも乾燥させすぎると脆く、破壊しやすい。そして永久不変なものではない。再構築することも必要となろう。そのような心象風景と学問風景の再構築には、強い意識的な行為が必要とされるに違いない。しかしそれを誘起させる原風景としての柏キャンパスの自然風景は今後もしばらくはこのままであり続けるだろう。其れを期待したい。

柏の葉キャンパス駅前、MD カフェにて

平成 22 年秋

鳥海光弘